

令和元年度 第2回宝塚市総合教育会議

- 1 日時 令和2年3月24日（火）15：30～16：30
- 2 場所 宝塚市役所3階 特別会議室
- 3 出席者 （構成員）中川市長 森教育長 川名教育委員 木野教育委員
望月教育委員
（関係職員）教育委員会事務局理事
管理部長 管理室長 教育企画課長 教育企画課係長
学校教育部長 学校教育室長 幼児教育担当次長
特別支援・人権教育担当次長
教育支援室長 学校教育課長
教育支援課副課長
社会教育部長 生涯学習室長
（事務局）企画経営部長 政策室長 政策推進課長 政策推進課係長

4 内容

■開会

○中川市長 挨拶

それでは皆さん、こんにちは。今年度2回目になります。宝塚市総合教育会議を始めます。

まず、傍聴人のことですが、本日は今のところ傍聴人の方がいらっしゃいませんので、この会議は公開が原則となっておりますので、公開についてこの後傍聴人がいらっしゃるかもわかりませんので、ちょっと確認をさせていただきます。

本日の議題である令和元年度諸課題への取り組みに対しては非公開とする必要がないと思いますので、公開といたしまして、この後、傍聴希

望がありましたら許可するという事でお伝えしたいと思いますが、それでよろしいでしょうか。

○各委員 はい

○中川市長 はい、ありがとうございます。そのように決定をさせていただきます。それでは次第によりまして会議を進めてまいります。

本日の議題は「今年度の諸課題への取組」であります。諸課題としては主にいじめ防止の対策、不登校の児童生徒への対応、また、いじめ問題再調査委員会が挙げられると思いますが、この3つの課題について、今年度の取り組み状況を踏まえて、御意見を伺いたいと考えております。

まず、いじめ防止と不登校の対応について取り組み状況を事務局から報告をしていただき、意見の交換をいたします。その後再調査の進捗状況を、報告をしてまいります。

では、初めにいじめ防止の対策につきましてお願いいたします。

■ 議事

議題1 令和元年度諸問題への取組

(資料について、事務局から説明)

○中川市長 ありがとうございます。それでは、不登校事案、不登校の児童生徒への対応につきまして、事務局からお願いします。

(資料について、事務局から説明)

○中川市長 ありがとうございます。いじめ問題、不登校の問題につきまして説明をいただきましたけれども、これにできれば関連して皆さんの御意見を頂戴したいと思うのですが、よろしく願いいたします。

また、つつい指名してしまうような感じですが、いかがでしょうか。

○木野委員 質問とかでもよろしいでしょうか。

○中川市長 ええ結構です。どうぞ。

○木野委員 最初のいじめの取り組み状況の方ですけれども、そのいじめ防止基本方針の改訂をされまして対策推進会議、先ほどオール市でという話がありましたけれども、とても横断的でオール市というのは大変すばらしい取り組みかと思うんですけれども、この会議の中で新たな発見と言いますか、何と言いますかね、こういう風に横断的に取り組んだことによって、今まで気づかなかったけど、こういうところが成果があつと言いますか、こういうところで見えなかったものが見てきたというような、もし何か具体例みたいなのが、ないかもしれませんが、こういうメリットがあったというものがもしあれば教えていただけたらと思います。

もう一点続けてもいいですか。

○中川市長 はい、どうぞ。

○木野委員 2点目ですけれども、いじめ防止対策推進法22条に基づく学校のいじめ防止委員会の設置状況になっているんですけれども、先ほど各校の学校基

本方針の改訂がされたというお話がありましたけれども、推進法22条の学校いじめ防止委員会ですね、こちらが既存の生活指導とか、そのまま使わないとなっているかと思うんですけども、そこをきちんとそういう形で、委員会が実際設置されているのか、機能しているのかという点を教育委員会としてはどの程度把握できているのか、あるいは把握できていないのか、その辺りもしわかれば教えていただきたいと思います。

○中川市長 はい、どうぞ。

○事務局 まず、2点目に言われたほうからお答えいたします。学校でのいじめの防止委員会なんですけれども、教育委員会の方にいじめということで、報告が上がってくる時には必ず学校で、その言われました委員会を経て上がってくることになっていますので、今までだったら生徒指導の会につけ加えてそれもとというようなところがありましたけど、今回はそうではなく、生徒指導委員会がない時でも案件が上がってきたらすぐにその会を開いて、これはいじめと認定するかどうかということを相談した上で上がってくるということになっていますので、どこの学校でも設置はされていますし、そういうことが機能しているというように認識しております。

それから、1点目の対策推進会議なんですけれども、メリットと申しますと、まず一つは、いじめ、子どものいじめは教育だけの問題だというような認識を持っておられた方については、やっぱり関わりがあって自分達もそのいじめの防止について関わりがあり、何かできることはないかという、本当に教育だけの問題ではないという意識を持っていただけるようになったと思っています。それから学校長も、この会には参加しているんですけども、学校がいかにより多くの人たちによって支えられているのか、こ

ういう対応がここでされている、これはまた別のところでされているということをつぶさにそれを感じて、いろんなところで対応していただいているということも実感していただいているところです。教育委員会についても、これまで自分達だけでものを考えやっていたところ、いろんな知恵を借りることで、より奥行きのあるというか、深みのあるというか、表面的な対応ではなく、もう少し色んなところと連携が進むといいですか、そういうようなことをできるということが新たに実感したところでありまして、今後何かあったら関係機関と相談しながらしやすくなったと感じております。

○木野委員 ありがとうございます。

○中川市長 よろしいですか。

○木野委員 はい。

○中川市長 他にいかがでしょうか。望月委員どうぞ。

○望月委員 そうですね。いじめに関しても、その認知の件数が上がっているということで、件数が、数字がどんどん増えていっている状況になっていると思いますし、不登校に関しても、ここで表があっても、ずばりここで数字がとか、パーセントが出ているんですけども、平成26年と30年を比べると、全国でもかなり上がってるし、宝塚市に関しては倍以上、3倍近くになっているんですけども、それは、それで何と言うんですか、認知されることが、出てくるというか、むしろその良いことかもしれないと思います。

友達が不登校になったということで、結構その、いろいろ不登校というんじゃないんですけど、学校に行きづらくなりまして、結構学校に行かなかった1年間だったんですけど、ただ、その中でやはり本人も体調不良だと言って行かない日と、今日は本当に理由がなくて学校に行かないんだという、明らかに熱が出てる日とか、いろいろあったわけですね。実際にその学校に行きたいモチベーションがすごく落ちてるから熱を出しているようなところも、ちょっと親としては感じたんですけども、明らかに体調が悪いとか、学校に行っても保健室へ行ってしまおうとか、そういう時もありましたので、そうすると本当に、いわゆる不登校として、理由として行かなかった日というのも10日とか、それぐらいだったので、いわゆる不登校としてはカウントされてないと思うんですけども、1年間で休んだ日数は4、50日休んでおりますので、本当のところはどうなのかなみたいなのところがあって、子どもの場合そういうきっちり分けられない部分というのがありますね。不登校なのか、体調不良なのか、気持ちの落ち込みなのか、そういうこともありますから、その数字に出てくる、出てこないというのはわかりにくいところもあるんですけども。

この場合は明らかに一番仲がよかった子が完全に不登校になっちゃって、学校に出てこなくなったというのが理由で、すごくしょげていたし、自分も同じようになってしまうという気分があった。その中で学校に行って、その教室から結構保健室に行っている時間も多かったんですけども、保健室の先生にすごく良くしてもらって、学校に居場所があったというか、保健室、本当に保健室にお世話になったんですけども、そういう風に居場所があるということがとてもありがたかったというのがありますので、子どもというのは色々なタイプがいて、いろいろなことにくじけたり、学校に行くのが辛かったりするんですけども、その中で、その学校にいろいろ

幅があって、学校に来て保健室でちょっと休んで、調子が出てたらまた教室に行っていいんだよっていう形で、緩く見てもらえたということが、とてもありがたかったというのがあります。

その不登校、いじめもそうですけれども、本当に個々のケース、数字に出てくるものではなくて、その何が原因かとか、そういうのがあるんで、そういうの一つ一つのケースを周りで認知して、非常に緩く支えていってあげることができれば本当にいいのかなと思いました。

そんなところですよ。すみません。

○中川市長 はい、ありがとうございます。川名委員、何かありますか。

○川名委員 そうですね。いじめについてはご覧になった方も、1週間ぐらい前でしたかね。NHKの番組で鹿川君の葬式ごっこという、私たちがいじめというものの重大さを認識するきっかけになった、鹿川君の事件というのがあるって、それをずっと追っかけている記者、元教育担当の記者なんですが、その人がもう80歳過ぎてるのに、なぜあれが起こったのかということ、今になってやっぱりこれを解明せずに死ぬのはいかんと思って尋ね歩くという番組だったんですけど、あれを見ながら、あの当時と今はもちろん人権感覚も違ってきますし、複数の先生が子どもに求められるままにお別れの言葉を色紙に書いたり、机に花やお線香を飾ってるんですけど、そんなことをするとは思えないんですけど、だから法律ができたりガイドラインができたということ、大きな前進であると思うんですが、そうすると今度は私も毎回、色々ご報告、いじめについて御報告をいただいて、どういう取り組みになっているかというのがあるんですけど、前に森さんも気にしておられましたけど、何か、ややその対応がパターン化しているというか、

そのマニュアルができたので被害者から聞き取りをし、加害者から聞き取りをし、双方の保護者にそれを伝え、謝罪会をするみたいな、そのある種対応がパターン化しているような感じがして、こんな風でいいのかなというのもたくさん検知されて、解決に向かうっていうのはいいわけなんですけど、やっぱり一方で、そういうパターン化されることによる心配、やりますよみたいな、本当にそれで子ども達の中に、そのことについて深く考えたり、そういうのが芽生えたりしているのかなと思いつながり聞いているんです。

なので、法律ができることはいいことだし、みんなでそれを共有するのはいいことですが、そうなればなっただけでちょっとまた別の、気がかりもあるなというのがちょっと正直に思っているところなんです。

不登校についてもすごく難しく、前にセンターの方で対応してらっしゃる現場の方のお話を聞いて本当によくやってくださっていると思って、数では周辺の自治体よりも多かったかもしれませんが、それはよくやっているから見つかっているわけで、あんまり数は気にしなくいいなと思うんです。ただ、私がずっと昔に不登校の問題を取材していた時のことからすると、原因が本当に様々で、学校にあればそれこそいじめをね、何とかするとか、教師の対応がよろしくなければ、そこを何とかするとか学校でできることもあるんですが、実はできないこともたくさん、ほぼ家庭にしか原因は見つけれないとかですね。

そういったのも結構あって、そうするとSSWの方とか、カウンセラーの方とかに力もいただくわけですが、そういうことを踏まえると、ここにちょっとね、書いてくださっている、この未然防止みたいなことに余力を入れるのもどうなのかなと、後でコロナのことが話題になるかもしれませんが、一人も感染者を出さないみたいなのを目指すと、すごい苦し

いことになりそうで、不登校もやっぱり集団生活に向いていない子ども、勉強は嫌いではないけど、みんなで一斉に同じようなことをするのが苦手とか、そういう子がいることも今わかってきていますしね。それをどうしても一斉にやらなきゃいけない学校側としては、どうするかというの、これ本当に難しいんですけど、あんまり一人も出ちゃいけないみたいな感じに、学校現場で不登校があったから、その学校がだめとか、そういう風に誰も思わないと思うんですけど、そういうことはみんなの、何て言うんですかね、共有する価値観として持っていた方が現場でも対応しやすいんじゃないかなと思ったりして、いじめも、不登校も、その人がこうやって集団で生きていく中で起こってくるので、すごく対応が大人の世界でも同じようなことがありますよね。

だから、それは難しいとは思いますが、どちらもよくやってくださっているということを理解した上で、ちょっとそういう若干の心配をしているということになります。

○中川市長 ありがとうございます。今の、はい、どうぞ。

○森委員 今、川名委員が言われたことなんですけれどもね。私が教師の時っていう、教師の時代というのは、やはり子どもたち同士で起きたことは、また学校の中で起きたことは子どもたち同士の中で解決をさせるということで、教師は対応をしてきた。今も根本的にはそこは変わっていないと思うんですけども、やはりその法律ができてからということに対しては随分と、様相が変わってきている、その中で、いつも委員会の方でいじめの案件が、認知件数が上がってきて、どういう内容で、誰からそれが上がってきたかという時に気になっているのが、多くは保護者からなんですよね。

このいじめがわかった、認知されたのは保護者から上がってきて、それで学校が対応していく。そこに例えば子どもたちが自分から学校の先生に言ったりとか、先生が見抜いていくとかっていういじめの認知が少ない、そのところがとっても気になる。

そういう意味ではやはり学校の方で、教師の方がそういう子ども、やっぱり何かちょっとあの子が元気がないとか、何かちょっと机離しておかしいとかっていう、そういう見極める力が少なくなってきたのか、弱まってきたのか、それともそういう風な子どもの声をしっかりと聞いていく、そういう時間がなくなっているのか、両面から考えていかなきゃいけないなということは、教育委員会の中でいつも議論をしているところですね。

○中川市長 ありがとうございます。今、先ほどの川名委員、それについて教育委員会事務局から何かありますか。

○事務局 はい、よろしいですか。不登校についてはですね、かつては不登校という名前ではなく登校拒否という名前ですときていました。それは子どもたちの方が行かないという、そういうことかもしれないんですけども、そうではなく、今不登校という呼び名になっているんですけども、子どもによっていろんな特性があったりしますので、学校だけということではなく、教育機会均等法というのができたこともあって、学校外のところでも居場所を見つけましょうというようになってきています。それと教職員の方も、これまで保護者から今日はしんどいと言っているので行きませんというと、病欠とすぐ結びつけるところはあるんですけども、それが2日、3日となると本当にそれが病欠なのか、それともやっぱり何か

そこに行かない、来れない原因があるのではないかという目が育ってきたというのも一方であると思っています。

そんな中で先ほど望月委員の方も学校が緩くとおっしゃっていただきましたけど、柔軟な対応をするということがこれから求められていますので、学校の方にもそういった対応ができるように、特に保健室が子どもの居場所になったり、最近は司書さんがいる図書室も、そういう対応の場所になったりということで、学校の中で居場所を見つけ、また違うところでも見つけることで、その子が生かされていくのであれば、その子にとっていいところを見つけていくというようなところを、保護者と一緒に考えていながら対応をしていくということを進めているところですので、これからもそういうことができるように、やってきたいなと思っています。

○中川市長 はい、ありがとうございます。ちょっと伺いたいんですけど、私も、その子の不登校の数が、2014年に宝塚市は0.17%で、その増えている数が、やはり国や県と比べてかなり小学校も多いし、中学校も4年前は2.85%が4.33%になっている。これに何か思い当たる場所はありますか。

○事務局 不登校の数なんで、先ほども少しお話しましたが、しんどいから行きませんというのを病欠と捉えていたところを、やはり、やっぱりそうではないのではないかという目をもって保護者や子どもと接しているときに、いろんな悩みを打ち明けてくれたりすると、それが不登校だったんだというような、目が育ってきたというのは一つあると思います。実際にはもっといるかもしれませんが、そこのところがなかなか発見できてないこともありますが、今回、先ほども説明の中であったように、いろんなアン

ケートをする中で、やっぱり学校に対して、いろんな思いを持っている子の気持ちがわかるようになってきたということもあって、そういうことも、こういう数字にあらわれている一つではないかと考えております。

○中川市長 この頃ちょっと、去年、一昨年ぐらいから感じるんですが、先ほど望月さんが言われたような、友達が不登校になって、やっぱりもう本当に自分もマインド、心がね、何かね。それは一自治体、教育委員会の問題ではなくて、国、日本全体だと思うんですけど、子どもたちが学校に行っていると、ごく最近ですが、私のとても仲のいい人のところの子どもさんが、兄弟相次いで学校に行かなくなりましたけれど、その理由をその子たちに聞いてみるとね、学校に行っていると自分が自分でなくなる、そんな気がする、だから自分を自分らしくするために学校にはもう行かないって親に言ってね、行かなくなりましたよ。そういう子がね、増えているんです。学校へ行っていると、何か自分のいいものが削がれてしまうようなね。これってね、深刻だと思ってね。だから単なる。前にメディア、新聞で読んだのは家庭の事情が80%とか、いじめとか、いろいろあるんですけど、そういう風に割合がすみ分けできない、複雑に絡まりあっていて、子どもたちはやっぱり率直に出しますよね。もう行っていたらもう自分がなくなりそうというのはものすごく深刻で、今の教育のあり方とか、いろんな、選択できないというか、強制的にその校区の学校に行かなきゃいけないし、あとは私学しかないとかね。フリースクールとか、そういうものがもうないし、そしたら、学校に戻るために、P a l とかっていうんじゃなくて、どっか、何か居場所みたいなものが必要な時代に、だんだん日本もなってきたんじゃないかなと、いじめなんかでもね。そういう子どもたちのもやもやが、何か、そういう風に誰かを標的にして、不登校といじめって別ものじゃな

くて、同じような空気の中で割と問題を抱えているような気がするんですね。けどそういうところを学校の先生方も余裕もないし、うちなんかSSWとか、宝塚やっているにもかかわらず、こんなに増えている。

不登校もいじめも、そういう人的なものじゃなくて、もっと中身の問題だろうなということで、今日は時間がないのであんまりそこ議論できないんですけど、またちょっと次の時には、後の諸々の、これもうちちょっと具体的に、その私はさっき67件が解消とか、61件が解消とかね。解消の中身とか、重大事態というのはないのかとか、そういうのを今日聞く時間がないし、あとこの総合教育会議って本当1時間でとてもじゃないけどね、時間足りないっていつも思っているんですね。もう少しきっちり議論していかないと、教育は深刻で、子どもたちが被害にあっている。

子どもたちが悲鳴を上げているのに、大人はいま一つ鈍感ですよ。でも、鈍感にならざるを得なかったり、解決方法がわからなかったり、けどそうは言ってもらえないのが教育委員会であり、総合教育会議の私たちこのメンバーでもあると思っています。ですから、そこはもう少し時間をとって、もしもご意見がなければちょっとコロナの関係で中、高、休園があって、また再開とか、そのあたりのところで少し説明をいただくように話を進めていいでしょうか。よろしいでしょうか。

では、そのコロナ対策の学校、園の対応について、ちょっと経過と、そして新学期に向けての考え方を説明してください。

○森委員　それじゃあ。まず、学校の臨時休業は3月25日までということになっていて、それから春季休業に入ります。その春季休業の間の土を除く午後1時から4時まで小学校の運動場を開放します。これは何が目的かというと、子どもたちの遊び場所を確保する。それからストレスが溜まってい

るから外で遊ぶ、ところが普通の公園に行くと、近隣住民がうるさいということから、だんだん子どもたちの遊び場所がなくなっているということから、やはり、せめてその小学校の子どもたちが自分たちで、保護者同伴ではなくて自分たちで行ける。その校区の小学校の運動場で遊べる。そういう場所を確保しようということで、4月3日まで運動場を開放いたします。

その間クラブ活動はどうするかというようなことになんですけども、運動場開放につきましては、保護者の責任のもとで行っていただきたい。クラブ活動につきましては、先生たちが子どもたちを集めたりとか、コロナの指導をする。それから1日2時間ということも決められています。そういう中で今宝塚市が、感染が増えているということで、明日お話ししようと思っていたんですけども、クラブ活動につきましては、春季休業中は活動を中止という形で、4月の始業式から学校を再開し、クラブ活動も細心の注意を払って取り組んでいくとしております。

それから、4月の始業式につきましては、実際不登校とかということもあるんですけども、小学校ではなかなか難しいということで、マスク着用で、そしていつもどおり、そのかわり手洗い、それから朝の検温、着いてからのまたアルコール消毒とか、そういうことを徹底的にして、始業式は集まらないで、放送で始業式をしようということを考えております。

入学式につきましては、卒業式と同じく在校生なし、来賓なし、しかし小学校の、特に入学式というのは親もそういうような期待もあるので、今の状況の中では2名まで。しかし、会場の中についてはなるべく離れた中で工夫をしていく、時間は大体30分ということで、今のところそういう方向でいこう、あと授業については、いろんな細かい諸注意、今日、国の方から、文科省の方からガイドラインが出ましたので、その細かい注意をしながらなるべく平常どおり学校再開に向けて取り組んでいこうと考えて

おります。

○中川市長　　そういうようなところでご質問とか、ご意見、はい。

○川名委員　　本当にね。大変なんですけど、いくつかあるんですが、この学校開放で、保護者の責任のもとでというのは、これはどういうことですか。誰かが必ず一人付き添うとかっていうことですか。それともそうではなくて、どう表現したらいいの、要するに自己責任ですよみたいなことですかね。そういうことですかね。

○森委員　　そうですね。運動場開放ですので、自己責任で。

○川名委員　　学校はかかわらないということですね。

○森教育長　　そうですね。はい。

○川名委員　　わかりました。私も今日1時に、先ほども文科省の会見を聞いていたんですが、もう憤りしかないんです。本当にもう学校にめちゃくちゃ負担を押しつける。そんなもう事細かにあるんですけどね。

例えば、子どもに毎日マスクをつけて登校させると、まず朝、教職員も子どもも体温を測れというわけですよ。それからマスクつけて登校させると、この今マスクを買うのにすごいみんな苦勞しているわけでしょ。私、花粉症ですけど買えないんですね。別に買えなくても花粉症だからいいんですけど、そのマスク手に入れるために多くの人は朝早くからドラッグストアの前に並んで、それで手に入れるとかって聞いていますし、そうする

と毎月子どもに25枚ずつ、マスクを、それをね。この先何カ月もじゃないですか、そんなことをもうよく言うよという、篠部委員がいらっしゃらないからちょっと詳しいことは、委員に聞きたいけど、ぜんそくのある子どもとかは別にして、健康な子は別に要らないわけですよ、マスクはね。だからそんなことまでこう、配ってくれるならいいですよ。台湾のように1週間に子どもは5枚、大人3枚が誰でもあるから手に入るという状況を作っているならいいんですけど、このマスク一つとってもすごく大変ですよ。

そんなことを、じゃあ国がちゃんと学校にマスクを届けますというならいいけど、それが一切なしですよ。全部学校でやってくださいっていうことで、これを何カ月も強いるのかと思ったらもう本当に憤りしかないんですけど、そういうのはどうされるんですか。

○森委員 一応ね。卒業式の時にはマスクがない家庭もあるので、咳エチケットというような書き方をしたんですよ。咳エチケットでお願いをしますと、教職員の方は、主催だからきちんとマスクはしてくださいということにしたんですが、保護者のほうでマスクをしていない、マスクがない保護者もあつたとかっていうようなことも聞いています。それで、状況が刻々と、その宝塚市、兵庫県の状況が刻々と変わっていく中でね。入学式、卒業式はその点だったですよ。卒業式だけ終わったらそれでよかった。ところが今回は始業式、入学式のあとずっとこの学校生活が続いていくわけですよ。そういう中で、この4月というのが、宝塚がちょっと、感染が増えているという状況の中ではね。やはり細心の注意を、感染防止の注意をしながら、子どもたちが学校に来られるように、そして学力を保障していくように、その方法を大事にしていこう、そうするとやはり4月の段階はマ

スクを着用する必要がある。

○中川市長 そのマスクがなければどうするんですか。

○森委員 そのマスクも作ってくださいと、今、布でつくり方とか。

○川名委員 はい、いっぱい出てますよね。ユーチューブとかに。

○森委員 それから子どもの方は給食の時に必ずガーゼのマスクをすることを言っていますので、家庭の方に、マスクがもしなければ作って、その中にガーゼを入れて洗っていくとかっていう、とにかくその方向で4月いっぱいということで、この後の教育委員会でその話はさせていただいて、またご相談させていただこうとは思っております。

○川名委員 今専門家の意見もね、いろいろ書かれているんですけど、健康な方がマスクをするというのはほぼあまり意味がない、ウイルスも通すし、だからその症状のある人も絶対にしてもらわないと困るわけですけど、ただでそうでない人にまでこうね。マスクがいきわたって、それで手に入りにくい状況が当分続くわけですよ。そういう中でやっぱり親はいろんな負担を負っているわけで、できるだけそういうものは独自に何か減らせないか、今もし感染者が出たら自宅、子ども自宅待機になるわけですけど、じゃあ子どもを家に、その感染状態の子を家に閉じ込めてどうするのかとかね。やっぱりもう本当に、丸投げなわけですよ。だから、ものすごく細かく、こういう時はどうするかというのをやっぱり決めて、保護者との間でもそれをちゃんとわかっている了解事項みたいにしておかないといけないなの

かなという風に思ったんですけどね。

普段でも学校には様々な負担がかかっているのに、それにこれを上乗せするのかという、本当にそんな感じになっていますから。

○中川市長 私も本当にコロナウイルスのことをいろいろ勉強していると、やっぱり子どもたちは命にかかわるのは、やっぱり障碍を持っている子たちとか、ぜんそくがある子とか、そういう子ですよ。他の子は感染してもほとんど軽傷で症状も出ない子もいるし、先ほど、宝塚市のコロナ患者が増えてきているって言うけれど。

○森委員 それは違います。

○中川市長 もうこのところはゼロで。

○森教育長 ゼロですね。増えているのは兵庫県ですね。すみません。

○中川市長 宝塚市の場合は、ある施設でクラスター状態が生み出されたということで、そこはちゃんと、今回県からも濃厚接触者とかは全部検査するようになりましてし、経路が不明な感染者は基本的に宝塚市では今存在しないんです。その施設で働いている人の同居人や家族に対しても、濃厚接触者として検査をするという方向でやっていますし、宝塚の子ども、1万、5,000人。

○事務局 1万9,000人です。

○中川市長 1万9,000人で、マスクは手づくりしてくださいというけど、家にミシンがないですね。

○事務局 ないですね。

○森教育長 今は手作りと言われてます。

○川名委員 そういうことをしてまでする必要があるのかですかね。子どもがマスクを着けるっていうのはすごく難しいんですよ。途中で触ったり、外したりもするわけで、だから、予防効果を期待できない部分に対してね、これは私の個人的な意見ですが、エネルギーを注ぐ意味はあるのかと。一方、たまたまデパートで若い女の人の手洗いを見ていると、実にぞんざいでいいかげんなんですよ。だから子どもにはやっぱり手洗いをしっかり教えてほしいと思うんですよ。それは防止の効果があるから、だけどマスクはどうなのという。

○中川市長 苦しいしね。一日中では。

○川名委員 電車の中でも見ている鼻出して口だけしている人とか、何かしようと思って平気で真ん中つまんで外して何かしてまたかけているとかね。ほぼ意味のないような、大人でもそういう意味のない使い方をしているんですよ。だから子どもにずっとそれをしてなさいってのは難しいと思うんですよ。

○中川市長 コロナウイルスは目からも入るからね。

○川名委員 粘膜ですから。

○中川市長 粘膜だから。

○川名委員 目を直接触ることは考えにくいですけど、でもまあ。

○中川市長 まずは手洗いを。

○川名委員 そうそう手洗いはもう絶対しないといけないんですけど、だから、そこは重々指導してもらいたいと思うんですけど。専門家でもマスクは満員電車の中だったら、飛沫をあびる可能性もあるから、満員電車に乗る人は着けたらいいんじゃないですかみたいな感じじゃないですか。WHOははっきり予防効果はありませんと言っているし。

○中川市長 うん、そうだ。

○川名委員 だから、WHOの言うことをどのぐらい信用するかは別にして、その程度ですよ。

○中川市長 だからもういつだったかな。2月に音楽会がありましたでしょ。あの時、子どもたちにはマスクを着用してと言って、全員していたんですけど、ずらしたりしていて、マスクの効果はないなと思ったんですね。だから私、強制というのは絶対マスクして来なきゃ登校させないとかね。そこまでやるのか。

○森委員　一つ訂正をすみません。宝塚市ではなく兵庫県が増えていて、ごめんなさい。そこは訂正しておきます。

それから、やはりマスクについては強制ではないんですけれども、やはり教室で勉強しているという中では、いけば満員電車ほどではないんですけれども、やはり今までの状況と違って、一つの教室の中で、一番多いところでは40人近い、それも二つに分けて授業をするということもなかなかできない、そういうような中でなるべく給食なんかも対面ではやめましようとかってというようなことも出ている。そういう中で自分のあれが飛沫しないようにということの安心では、やはりマスクというのは一つ安心できるという、そういう一つの方法かなということ思うので、絶対ではないんですけれども、やはりマスク着用というのは、この4月始まった時には、やはりここは一つの取り組みの中の大きな、お願いすることではないかなということをおもっております。

○望月委員　私も一つ。

○中川市長　はい。

○望月委員　毎年のことなんですけど、インフルエンザというのが学校で流行ることがあります。コロナの感染力はインフルエンザ以上だという人もいれば、それほどでもないという説もあったりして、その辺はわからないんですけど、小学生の子どもがいた立場からしますと、必ずその春休み明けて4月に学校に行くと風邪をもらってくるというのはあります。それは全然注意していないとか、手を洗ってないとか、春休み中だけっていて、学校に行くと友達とべたべたやっていて風邪を移ってくる。

大体、連休の前ぐらいに鼻水たらしているということがよくあるんですけど、そういう感じで、普段から学校というのは感染症、軽い感染症がいきかっている場所だという認識があります。その中で、多分その親御さんとかも風邪をもらってきたらすごく神経質になってしまうと思うんですよね。そういう要らない苦労みたいなものに対しての対応というかですね、そういうこともちょっと考えておかなければならないということが一つあります。

もう一つは、その2週間前にイタリアとかが、こんな状況、イタリアどころか、アメリカとかがこんな状況になるとは、恐らく誰も想像していなかったと思うんですけれども、当然、今から2週間後に、我々が今想定しているのとは全然違う状況に日本、あるいは近畿地方がなるということもあるということ、想定に入れていろんなことを考えていかなきゃいけないということがあると思います。その2点ちょっと言いたかったことです。

○中川市長 それはマスクとはあんまり関係ないんですか。

○望月委員 すみません。マスクとは関係ないです。マスクはもう、マスクに関しては国が用意できないのに、何で用意しなきゃいけないんだというのが正直なところありますね。今までその使い捨てマスクというのはすごく学校は備蓄していて、よく給食の時にガーゼマスク、うちの息子忘れてましたんですけど、ストック、学校がくれると、当然そのような意識でいる保護者は結構いるかもしれないですし、あるいは手に入らないものであるからどうしようもないと開き直る方もいらっしゃるかもしれないと、その中で手作りマスクどうしようというんですけど、手作りマス

クの効果というのは、多分その使い捨てマスクよりもだいぶ緩いと聞いていますので、そんなものに効果があるのかというのはもう全然、私は強制する必要はないですけど、その気休めということで、みんなに同じ緊張感を保つ、顔を触らないようにするという効果があると思うので、そういう意味では、そういう指示を出すのは構わないけど、そこにこだわりポイントではないと思います。

○川名委員　でも、その用意できなくてつけてない。今日もびっくりしたんですが、何とか病院でクラスターが発生したら、その職員はタクシーに乗るのを拒否されたとか、もうばい菌扱いされていて、ホームページでその病院がね。この戦力が少なくなった中で日夜頑張っているんでね。どうぞもうちょっと温かい目で見てくださいなど、ホームページに出すんですよ。もう本当にあり得ないようなことですよね。だから、たまたまマスクをしてないとか、昨日も電車に乗っていたら、たまたまマスク、どっかから咳の音が聞こえたんですよ。ゴホン、ゴホンって、そしたら電車の中の人が一斉に見るんですよ。それでマスク、このことによって起こる二次的な、この嫌なこと、いじめですとか、たまたまマスクしてない子が何かいろいろ言われるとかね。そういうことあったら嫌だなと思うんですよ。しなければいけないことを一つでも増やすと、それに反するとけしからんみたいな情勢になっていくので、それをどうするか。

今、イタリア大変ですけど、1カ月ぐらい前ですかね。休校になる時に、ある高校の校長先生が自分の生徒たちに対して発したメッセージというのがすごく評判になったことがありましたね。それはアジアから来た人が殴られたりということもあったので、君たちはこの期間を静かに、普段読めない本なんかを読んで過ごしてくださいと、それで最後に校長

先生が言ったことは、このウイルスによってそういう人を差別したり、冷たい目で見るといったことがあれば、それはもうウイルスとの戦いに負けたことになるからみたいなことでしたよ。それはすごくいい、本当に教育者らしいメッセージで、そうだなと思いながら読んでんですけど、やっぱりそういう二次的に起こってくる好ましくないことに対して学校現場ではね、しっかり本当に負担が多くなっているところに申し訳ないんですが、そういうものにもちゃんと目配りをして、妙な仲間外れとかいじめが起こらないようにしていかなければいけないかなと思いますね。

○中川市長 それは強制ですよ。文科省の言うことを聞くんならばね。そしたら、それを用意できるかどうかということ保護者に聞くべきじゃないかと思うんですけどね。とても無理というんだったら対策を考えないといけないと思いますよ。作ってくださいだけじゃね。余りに無責任で、やっぱり4月いっぱい、5月まで、私は続くと思うので。

○川名委員 何か気温によって、多くの、今わかっている6種類のウイルスは気温が上がると少し活動が減っていくんですけど、今回のこの7番目はよくわからないのですね。

○中川市長 強いんですよ。結構ね。

○川名委員 シンガポールとか、東南アジアで結構蔓延してて、ただ湿度には弱いかもしれないという。

○中川市長 そう、お風呂場がいいんですよ。

○川名委員 湿度にはちょっと弱いかもというがあるので、そうすると6月とかになつてくると若干下火になるかもしれない、かもしれない、わかりませんよ。

○中川市長 1年ぐらいは続くかもしれないって専門家はね。

○川名委員 いや、もちろん、だから終息という概念はないわけですよ。

○中川市長 ないですね。

○川名委員 新薬が開発されるか、ある程度この感染者が増えて、抗体持つ人が増えて、その人たちがブロックの役割をしてくれるようになれば、広がりはずごく減るんですけど、そのどっちかがと考えると、1年は続くんでしょね。じわじわと。

○森委員 マスク強制というような考えではないんですけども、いけば多くの保護者の方が、学校に行ってそういうような感染の防止のことで、安心ができるような環境つくっていくための一つの取り組みとしてマスクということでお話をさせていただきましたので、今、市長がおっしゃったように保護者に聞いていくということもやっていかなければいけない、もう一方でやっていかなければいけないなということは思いましたので、はい、そういうような形もしていきたいと。

○望月委員 体育とか、休み時間とかは、そのマスクをしていると苦しいですよ。

○中川市長 苦しいですよ。遊べないよね。

○望月委員 体育とかはどうするんですか。指導指針としてはどうする感じなんですかね。

○川名委員 今日は、テレビの30分ぐらいの会見だったので、細かいのは、もう皆さんのお手元には届いているんですかね。

○森委員 はい。

○川名委員 ガイドラインはまだ。

○事務局 来ています。

○川名委員 とにかく終日着けていろっっていうような指示だったと思うんですが、そういうの細かくありましたか。体育の時も着けてなさいとか。

○事務局 ちょっと最後までまだ読めてないので。

○川名委員 そうですね。出たばかりで。

○事務局 はい。

○中川市長 そこはちょっと慎重にしたほうがね。苦しいわね。私、なんか絶対無理

だもん。

○川名委員 給食の配膳とか、そういうことについても事細かにありましたよね。本当に。

○中川市長 そこまで言われたくないわってね。

○川名委員 本当にこっちに任せてって言いたいですよ。

○中川市長 では、ちょっとマスクはそういうような形で。

○森教育長 はい。

○中川市長 あとあれですかね。小学校1、2年生登校は、これは順調に行っています。1、2年生の子で保護者が休めない。これは大丈夫ですか。

○事務局 はい。それは大丈夫です。

○中川市長 給食はフードロスみたいなことはなかった。

○事務局 特にはないです。

○中川市長 あと何か。もう時間がちょっとなくなっただけですけど、何かありますか。

○中川市長 大丈夫ですか。そしたらそのような感じで、入学式は保護者を2人、急

に1人とかにしないでほしいんですけどね。がっかりするみたいですよ。

○森委員　なるべく、保護者の気持ちに沿ってということをやっていたんですけど、この状況が変わっていく中では、やっぱり刻々とその辺のところは考えていかなきゃいけないなと思っています。入学式は、卒業式よりも時間も短いので、なるべくは2名ということで行きたいというような思いは強く持っております。

○中川市長　急に変わるのが大変みたいですよ。だから方針決めたらある程度よっぽどね。オーバーシュートとかなければやってあげた方がいいんじゃないと思いますけどね。

では、他になればいろいろなご意見ありがとうございました。これで総合教育会議を終わります。お疲れ様でした。